

エジプト先王朝時代研究のこの10年

高宮 いづみ

The Last Ten Years of Archaeological Work on the Predynastic Period in Egypt

Izumi H. TAKAMIYA

キーワード：先王朝時代、ナカダ文化、タサ文化、Aグループ文化、マーディー・ブト文化

Key-words: Predynastic period, Naqada culture, Tasa culture, A-group culture, Maadi-Buto culture

はじめに

本稿では、エジプト考古学の中でも、主に先王朝時代（前4千年紀）とその前後の時代（前5千年紀～前3千年紀初頭）に絞って述べることにした。

この時代は、農耕・牧畜経済がナイル河流域に定着し（前5千年紀）、先王朝時代（前4千年紀）に初期国家形成に向かって文化・社会が著しい変化を遂げ、初期王朝時代（前3千年紀初頭）に初期国家の体裁が整ってきた時期である。したがって、該期研究では、農耕・牧畜の定着過程、初期国家の形成過程、初期国家の形態等が常に底流となる関心事であった。ここでは、それまでの研究から認識されていた研究課題を踏まえつつ、ここ10年の現地調査の動向と成果をまとめるとともに、研究組織とテーマの動向について述べる。

現地調査動向

エジプトの先史時代遺跡調査は、それが本格化した20世紀初頭以降、主に「上エジプト」と呼ばれるメンフィス(Memphis)（カイロ南西のナイル河西岸）以南のナイル河流域に集中してきたが、1980年代以降、メンフィス以北の「下エジプト」（デルタ）の遺跡調査が本格化し、西部砂漠の調査も進められるようになって、次第に対象領域がこれらの地域にも広がっていた。

デルタと砂漠地帯における調査の活発化は、当初は新規な学術情報の入手に動機づけられていたが、エジプトの遺跡監督官庁である考古最高会議(Supreme Council for Antiquities、以下SCAと略述)が、遺跡保存を主たる目的としてデルタ調査優先の方針を打ち出したことで(Hawass 2003)その実施に拍車がかかった。一方、これと連動して、現在上エジプトにおける新規調査の許可取得は極めて難しくなり、今後しばらくデルタ・砂漠地帯優先の調査傾向が継続すると思われる。

下記に紹介する調査の多くは、上エジプトと砂漠地帯に

ついては *Archéonil* 12 (2002) に、下エジプトについては *Archéonil* 13 (2003) に概要が紹介され、いずれの地域についても Hendrickx et al. (eds.) 2004 および Midant-Reynes and Tristant (eds.) in press に関連論文が多数掲載されている。以下、個別には一部の主要文献のみに言及した。

1. 上エジプトの調査

19世紀末以降、各地で発掘調査が繰り返されてきた上エジプトでは、前5千年紀末にバダリ文化が営まれ、前4千年紀初頭からそれに続いて（もしくは一部重複して）ナカダ文化が起こり、それが王朝時代まで継続したことが明らかになっている。このナカダ文化の間に、社会が複雑化し、少数の有力政体（王国）の相克を経て統一国家の形成に至ったと考えられることから、この10年の上エジプトにおける重要調査課題の一つは、ナカダ文化における文化・社会の変化の解明であった。

先述のような事情から、近年の上エジプトにおける現地調査は、古くに調査権を獲得し、長期的に調査を継続していた調査隊とその調査地にほぼ限られることになった。この10年間に調査が実施された主な遺跡として、南から、エレファンティネ (Elephantine) (集落)、ヒエラコンポリス (Hierakonpolis) (集落と墓地)、エルカブ (El-Kab) (墓地)、アダイマ (Adaima) (集落と墓地)、アビュドス (Abydos) (墓地) 等が挙げられる。

これらの遺跡のうち、ヒエラコンポリスとアビュドスは先王朝時代（ナカダ文化）の王国の首都と考えられる遺跡である。ここ10年の間に、両遺跡の墓地において、支配者の墓の調査と研究が実施された結果、当時の支配者の実体が明らかにされつつある。ヒエラコンポリス遺跡（ヒエラコンポリス調査隊、現隊長: R.フリードマン (Friedman)、に概報 Friedman 1999、年報は *Nekhen News*）では、HK6地区において大型墓が複数検出されている (Adams

2000)。該期としては極めて稀なことに、柱穴や柵基部の残存から建造物の上部構造が推測されている、付近からは、石製彫像断片、テラコッタ製マスク、両面加工の動物形フリント製品、象の埋葬等、支配者たちの富と権勢を示す遺物が多数出土した。一方アビュドス遺跡（ドイツ考古学研究所、隊長: G. ドライヤー (Dreyer)、*MDAIK* に年報)では、ウム・エル=カアブ (Umm el-Qaab) の初期王朝時代の王墓地に隣接する U 墓地において発掘調査が継続された。同墓地最大の墓であり、ナカダⅢ期に年代付けられる U-j 号墓を中心とする大型墓から、エジプト最古の文字資料 (小牌、封泥、土器の刻銘) とパレスチナ様式の土器が豊富に出土しており、先王朝時代の行政組織や生産・流通組織に関する新たな知見を提供した (Dreyer 1998; Hartung 2001)。

また、ヒエラコンポリスの大型集落址の一角である HK29A 地区では、ナイル河下流域最古の神殿址 (ナカダⅡ～Ⅲ期) の発掘調査が継続され、楕円形の前庭を持つ大型神殿の全貌が明らかになりつつある。さらに、HK11 地区および HK24B 地区では、計 3 カ所の加熱・焼成施設が検出され、該期の土器生産とビール生産に用いられたと考えられた。これらは、当時の生産組織と専門化を考察する資料となっている。

その他、ナカダ文化の小型遺跡であるアダイマ (フランス・オリエント考古学研究所、隊長: B. (ミダン・レイネ) Midant-Reynes) では、ナカダ文化 (ナカダⅠ期～初期王朝時代) の集落と墓地が詳細に調査された (Midant-Reynes and Buchez 2002; Crubezy et al. 2002)。遺跡は小規模ながらも、集落と墓地が両方調査された例として貴重である。さらにナカダ近くのダンフィーク (Danfig) (ベルギー調査隊、隊長: P.M.フェルメルシュ (Vermeersch)) において、新に小規模なナカダ文化の集落址が検出されたため (Vermeersch et al. 2004)、新石器時代末から先王朝時代にかけての小型集落に関する情報が増加した。

上エジプトにおいては、これまで初期王朝時代の集落の発掘例は少数に限られてきたが、第 1 急湍にあるエレファンティネ (ドイツ考古学研究所、調査担当: M.ツィールマン (Zierman)、*MDAIK* に年報) では、サテト神殿域と城塞地域を含む一部の地区の発掘調査によって、先王朝時代もしくは初期王朝時代の層が出土しており、近年第 1 王朝前半に造営が始まった城塞地域の調査が進展した。今後、城塞地域の発掘調査が拡張されることによって、さらに初期王朝時代の集落の様相が明らかになることが期待できる。

2. 下エジプト (デルタ) の調査

デルタにおける先王朝時代前後の遺跡調査は後発であっ

たが、1998 年までの約 20 年間に、デルタには前 4 千年紀中葉からマーディ・プト文化が普及し、ナカダⅡ期末以降、上エジプトから普及したナカダ文化の影響を受けて文化が大きく変質して、王朝時代に至ったことが明らかにされている。

前述のような SCA の方針もあって、近年デルタの調査は活発になった。1980 年代に実施されたデルタ東部の遺跡分布調査に加えて、2004 年以降、中・西部の遺跡分布調査が実施され (エジプト探検協会 (Egyptian Exploration Society) のデルタ調査チーム)、広範囲の遺跡分布が明らかになりつつある (Wilson and Rawland 2006)。この 10 年間に発掘調査が実施された下エジプトの主な遺跡として、南からサッカラ (Saqqara) (墓地)、ヘルワン (Helwan) (墓地)、マーディ (Maadi) (集落)、カフル・ハッサン=ダウド (Kafr Hassan Daud) (墓地)、テル・エル=ファルカ (Talle-Farkha) (集落)、コム・エル=カリガン (Kom el-Khaligan) (墓地)、サイス (Sais) (集落)、プト (Buto) (集落)、ミンシャト・エザット (Minshat Ezzat) (集落と墓地) などが挙げられる。

デルタにおいては、これまでマーディ・プト文化以前の文化堆積は考古学的に確認できていなかったが、デルタ西部のサイス (San el-Hagar) における 2001 年の調査 (エジプト探検協会、隊長: P. ウィルソン (Wilson)) が、マーディ・プト文化層の下層に、新石器時代の文化的堆積を明瞭に検出した (Wilson 2006)。今後、デルタにおける新石器文化と既知の新石器文化 (ファイユーム文化、メリムデ文化、オマリ文化) との関係解明が重要な課題となるであろう。

かねてからデルタにおける先王朝時代の王国の中心地と目されてきた西部デルタのプト (ドイツ考古学研究所、調査担当: D. ファルティンク (Falting) と U. ハルトウンク (Hartung)、年報は *MDAIK*) は、近年の調査と土器研究の結果、最初期 (前 4 千年紀中葉) の層から南レヴァントの土器と形態や製作技法が類似する土器が多量に出土することが明らかになり、南レヴァントと密接な関係があったことが推測された (Falting 1998, 2002)。また、さらにその後の調査で、先王朝時代ナカダⅢ期の行政に関連する建造物と考えられる大型日乾レンガ遺構が検出され、王朝開闢以前のプトの重要性が明らかになりつつある。

東部デルタのテル・エル=ファルカ (ポズナン考古学博物館とクラクフ大学、隊長: M. クロドニキ (Chlodnicki)) は、デルタにおいて最も広範囲に先王朝時代の集落址が調査された遺跡である (Chlodnicki et al., 2002)。マーディ・プト文化とナカダ文化の層が検出されており、近年検出されたマーディ・プト文化期に始まったとされるビール生産址は、デルタで確認された最古の例であり、土器や石

器に関して、従来あまり知られていなかったデルタにおける生産組織とその発達が考察されてきている。

東部デルタのコム・エル＝カリガン（フランス・オリエント考古学研究所、隊長: B. Midant-Reynes）において、ナカダⅢ期に年代付けられる小規模な墓地が検出された。ナカダ文化の遺物の他に、マーディ・プト文化の遺物が存在し、この時期にもマーディ・プト文化が残存していた可能性が示唆されたが、これまでのところ、ナカダⅢ期におけるマーディ・プト文化については確実なことは分かっていない。

初期王朝時代の首都メンフィスの対岸に位置するヘルワンは、かつての調査で約1万基の初期王朝時代の墓が検出され、知られる限り初期王朝時代最大の墓地である。1997年以降、発掘調査が再開され（マクワイア大学、隊長: E. C. ケーラー（Köhler））、新しい墓が多数検出されている。その結果、ヘルワンの墓地は第1王朝開闢前まで遡る可能性が明らかになり、先王朝時代末以降のメンフィス地区に関して新しい情報を提供している（Köhler 2004）。この調査の結果、第2王朝以降の土器編年が近々著しく改良されることが期待される（Smythe 2004）。

メンフィスに付属する墓地区サッカラでは、ウナス王ピラミッド参道近くで、2002年に第2王朝の王墓の可能性のある墓の地下構造が新たに検出された（van Walsem 2003）。他にも、ジェセル王の階段ピラミッド東側、旧考古庁事務所西側、アブシール（Abusir）村近く等において、初期王朝時代の遺構が検出されており、今後も新しい遺構が多数検出される可能性が高い。

3.1 砂漠地帯

1980年代以降の調査によって、アフリカ大陸北東部の砂漠地帯には、終末期旧石器時代から新石器時代にかけての比較的湿潤であった時期（前5000年頃に終焉）に、多数の遺跡が形成されたことが明らかになった。当初はオアシスと少数の遺跡に調査が限られていたが、ここ10年の間にそれまで調査が行われてきた遺跡の情報が増加するとともに調査遺跡数も増えた。この10年に調査が実施された主な遺跡として、南からナブタ・プラヤ（Nabta Playa）、スーダン北部からエジプト南部にかけての西部砂漠各所（後述 ACACIA プロジェクト）、ナカダ（Naqada）西方、ダックラ・オアシス（Dakhla Qasia）、ファラフラ・オアシス（Farafra Oasis）、ファイユーム（Fayum）などが挙げられる。

終末期旧石器時代から連続・断続的に人間活動の痕跡が残される砂漠地帯では、ナイル河流域の先王朝時代に先行する文化が存在することはすでに知られていた。近年の調査は、さらに砂漠の文化とナイル河流域の文化との関係に

ついて詳細を明らかにしつつある。特に、上エジプトのバダリ文化やナカダ文化の特徴である黒頂土器は、これらの文化より古い時期にスーダンとエジプト南部の西部砂漠で製作されていたことが、ケルン大学 ACACIA プロジェクト（隊長: R. クーパー（Kuper））等の調査の結果分かってきた（Remar 2002）。また、ダックラ・オアシス（カルガリ大学、隊長: マクドナルド（M. McDonald））から出土した土器の研究は、同地の文化がナイル河流域の先王朝時代文化に影響を与えていた可能性を示唆したという（Hope 2002）。ナカダ西方の砂漠中において、テーベとナカダ付近からヒウ（Hiw）を経てカルーガ～ダックラ・オアシスに向かう砂漠道付近から、バダリ文化やナカダ文化の遺物も検出されており（The Theban Desert Road Survey、隊長: J.C. ダーネル（Darnell））、ナイル河流域と砂漠の遺跡の間に、密接な関係があったことは確実である（D. Darnell 2002, J.C. Darnell 2002）。

また、近年「タサ文化」に関する新たな資料が増加した。タサ文化は、20世紀前半に G. ブラントン（Brunton）によってバダリ文化に先行する文化として設定されたが、その後存在が疑問視されていたところ、ナカダ遺跡東方砂漠中のワディ・アトゥラ（Wadi Atulla）（Friedman and Hobbs 2002）とナカダ西方のワディ・エル＝ホル（Wadi el-Hol）（D. Darnell 2002）において、タサ文化の埋葬と遺物が検出された。南方ナブタ・プラヤに近い西部砂漠中のゲベル・ラムラ（Gebel Ramrlah）の墓地やスーダンからも、タサ文化のものと類似する土器が出土しており、この文化が砂漠地帯に分布し、むしろ南方との関係が強いことが明らかになった。さらに、先王朝時代に下ヌビアに分布していた A グループ文化の土器が西部砂漠からも検出されており、この文化を担う人々が砂漠地帯でも活動していたことが明らかになっている（Lange 2003）。

ダックラ・オアシスと繋がる砂漠道の途中にあたるゲベル・チャウティ（Gebel Tjauti）では、先王朝時代末の岩壁画も発見されている（J.C. Darnell 2002）。岩壁画には、同時期のアビュドス遺跡 U 墓地出土の遺物とも共通するような、当時の支配者と関連するモチーフが含まれており、この地区の砂漠道が、統一王朝形成に向けての王国間の相克の中で、経済的・軍事戦略的に重要なルートであったと推測された。

組織・出版動向

近年エジプト学全般にわたって、時代別あるいはテーマ別に研究者同士が互いに緊密なコミュニケーションを取るべく、個別に組織を作って国際会議を開催したり、テーマ別出版物を発行するようになっている。先王朝時代についても例外ではなく、現在該期前後を研究テーマとする組織

ができています。

1. 国際会議

現在活動している国際的な組織として、ポズナン考古学博物館を中心とする国際会議と先王朝時代の国際会議の2つが挙げられる。

ポーランドのポズナン考古学博物館が主催する国際会議は、アフリカ大陸北東部（主にエジプトとスーダン）の旧石器時代を含めた先史時代を対象とする。L. (クシュザニアク (Krzyzaniak) 等が中心となって1980年に最初の国際会議を開催して以来、ほぼ3年ごとに毎回テーマを変えながら会議が行われ、研究者間の情報交換と交流に貢献してきた（最近の梗概集が Krzyzaniak et al. (eds.) 2000; 2003）。同会議に、エジプト・ナイル河流域だけではなく、スーダンや砂漠地帯を対象とする多数の研究者が参集した背景には、主催者の幅広い人脈と温厚な人柄があった。同会議に日本から最初に参加したのは藤本強氏であり、2000年に高橋龍三郎氏と筆者も初参加した。その際クシュザニアク氏は、日本との良好な関係を絶やさないう、日本の若い研究者をたくさん連れてきて欲しいとおっしゃって、日本の研究者が参画する機会を広げてくださった。同会議は、2003年と2006年にも開催されたが、クシュザニアク氏が2004年に亡くなったことは非常に残念である。ここに心から哀悼の意を表したい。

上述の会議にも触発されて、近年先王朝時代と初期王朝時代にテーマを集中させた国際会議「エジプトの起源 (Egypt at its Origins)」が開催されるようになった。初回は2002年にポーランドのクラクフで開催され（梗概集が Hendrickx et al. (eds.) 2004）、第2回は2005年にフランスのトゥールーズで開催された（梗概集は Midant-Reynes and Tristant (eds.) in press）。第3回目は2008年7月にロンドンで開催される予定である。

さらに、4年ごと（オリンピック年）に各国のエジプト学者が集う「国際エジプト学会議」(International Congress of Egyptologists) における先史部会でも、先王朝時代に関する最新情報が発表されている（梗概集は、Eyre (ed.) 1998; Hawass (ed.) 2003; Goyon and Cardin (eds.) 2007）。

2. 出版・成果公表の動向

かつては学術定期刊行誌が主要な論文発表の場であったが、近年、国際会議の結果を、単なる梗概集ではなく、会議参加者以外の論文も多数加えて、充実したテーマ特集として出版することが慣例化した。上記国際会議の梗概集がその顕著な例であるが、その他にも、先王朝時代前後に焦点を当てた論文集が公刊されている。主要な論文集として、エジプトとレヴァントの関係を扱った van den Brink and

Levy (eds.) 2002（やはり国際会議の梗概集）やエジプトとヌビア・砂漠地帯との関係を扱った Friedman (ed.) 2002 が挙げられる。

また、定期刊行誌として、1991年に創刊された *Archéonil* が、近年先王朝時代前後に関する最新情報の重要な発信源になってきた。先史時代の専門家が編集委員を務め、エジプトを中心とする先史時代の北東アフリカに関連する論文を掲載している。巻末に付される S. ヘンドリクス (Hendrickx) 編集の充実した関連文献リストは、出版動向を知る上で有用な資料である。

先王朝時代に関する多数の単行本が出版された中で、概括的な著作として、主に新石器時代から先王朝時代を扱った Midant-Reynes 2003 と高宮 2003 が、初期王朝時代を扱った Wilkinson 1999 が挙げられる。

テーマ論文集と特化雑誌の活性化は、近年の研究者間の緊密な交流を通じた研究成果の結実であるとともに、膨大な情報の中から効率よく情報収集を行うためにも役立ってきた。出版物を通じての情報交換に加えて、今日多くの調査隊の調査成果や国際会議の内容は現在インターネットで公開されるようになっており、さらに電子メールを通じた研究者間の頻繁な情報交換が、10年前にはなかったような速やかな学術情報交換を可能にしている。

おわりに

近年の先王朝時代研究では、1990年代以降欧米考古学で扱われる各種テーマがおおよそ全て取り扱われてきたが、埋葬と社会、エスニシティとアイデンティティ、生産における専門化がやや目立ったことを除くと、概ね伝統的な製作技術研究や文化交流の研究が主流を占めたように思われる。むしろ地域的な課題が地道に解決されてきたと言えるであろう。

冒頭で述べたように、先王朝時代研究の焦点の一つは初期国家の形成過程にある。B.J. ケンプ (Kemp に続く T.A.H. ウィルキンソン (Wilkinson) の政体統合のプロセスに関する研究 (Wilkinson 2000) の刺激もあってか、該期の主要政体の拠点であるヒエラコンポリス、アビュドス、ヘルワン、プト等の調査が熱心に行われ、政体統合のプロセスに次第に肉付けができてきた。さらに、従来農耕・牧畜の起源や先王朝時代諸文化の起源と相互関係には不明な部分が多かったが、ここ10年でデルタと砂漠地帯の資料が増加し、各文化を個別に捉えるのではなく、面的に広がる地理的環境の中で、時間を経て推移する人間の移動や交流を含めた考察の中から、該期の歴史を考えるための基盤が整えられつつあると考えられるであろう。

参考文献

- Adams, B. 2000 *Excavations in the Locality 6 Cemetery at Hierakonpolis 1979-1985*, The Egyptian Studies Association/ London.
- Archéonil (Revue de la société pour l'étude des cultures prépharaoniques de la vallée du Nil), Cybele/ Paris.
- Chlodnicki, M., K.M. Cialowicz, R. Ablamowicz, T. Herbich, M.S. Jordeczka, M. Jucha, J. Kabachinski and A. Maczynska 2002 Tell el-Farkha Seasons 1998-1999. Preliminary Report. *MDAIK* 58: 89-117.
- Cruzezy, E., T. Janin and B. Midant-Reynes 2002 *Adaima. 2. La nécropole prédynastique*, IFAO/ Cairo.
- Darnell, D. 2002 Gravel of the Desert and Broken Pots in the Road: Ceramic Evidence from the Routes between the Nile and Kharga Oasis. in Friedman (ed.) 2002: 156-177.
- Darnell, J.C. 2002 *Theban Desert Road Survey in the Egyptian Western Desert. Vol. 1: Gebel Tjauti Rock Inscriptions 1-45 and Wadi el-Hôl Rock Inscriptions 1-45*, Oriental Institute/ Chicago.
- Dreyer, G. 1998 *Umm el-Qaab I. Das prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse*. Philipp von Zabern/ Mainz.
- Eyre, C.J. (ed.) 1998 *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists, Cambridge 1995*, Peeters/ Leuven.
- Faltung, D. 1998 Recent Excavations in Tell el-Fara'in/Buto: New Finds and their Chronological Implications. in Eyre (ed.) 1998: 365-375.
- Faltung, A.D. 2002 The Chronological Frame and Social Structure of Buto in the Fourth Millennium BCE. in van den Brink and Levy (eds.) 2002: 165-170.
- Friedman, R.F. 1999 Preliminary Report on Field Work at Hierakonpolis: 1996-1998. *JARCE* 34: 1-35.
- Friedman, R. 2002 *Egypt and Nubia. Gifts of the Desert*, British Museum Press/ London.
- Friedman, R. and J.J. Hobbs 2002 A 'Tasian' Tomb in Egypt's Eastern Desert. in Friedman (ed.) 2002: 178-191.
- Goyon, J.-C. and Cardin, C. (eds.) 2007 *Proceedings of Ninth International Congress of Egyptologists, Actes du neuvième Congrès International des égyptologues, Grenoble, 6-12 septembre 2004*, 2 vols., Peeters/ Leuven.
- Hartung, U. 2001 *Umm el-Qaab II. Importkeramik aus dem Friedhof U in Abydos (Umm el-Qaab) und die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 4. Jahrtausend v. Chr.*, Philipp von Zabern/ Mainz.
- Hawass, Z. (ed.) 2003 *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century, Proceedings of the Eighth International Congress of Egyptologists, Cairo, 2000*. 3 vols. The American University in Cairo Press/ Cairo.
- Hawass, Z. 2003 Site Management and Conservation. in Hawass 2003 (ed.): 48-60.
- Hendrickx, S., R.F. Friedman, K.M. Cialowicz and M. Chlodnicki (eds.) 2004 *Egypt at its Origins. Studies in Memory of Barbara Adams*, Peeters/ Leuven.
- Hope, C.A. 2002 Early and Mid-Holocene Ceramics from the Dakhleh Oasis: Traditions and Influences. in Friedman (ed.) 2002: 39-61.
- Köhler, E.C. 2004 On the Origins of Memphis. The New Excavations in the Early Dynastic Necropolis at Helwan. in Hendrickx et al. (eds.) 2004: 295-315.
- Krzyzaniak, L., K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.) 2000 *Recent Research Into the Stone Age of Northeastern Africa*, Poznan.
- Krzyzaniak, L., K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.) 2003 *Cultural Markers in the Later Prehistory of Northeastern Africa and Recent Research*, Poznan.
- Lange, M. 2003 A-Group Settlement Sites from the Laqiya Region (Eastern Sahara, Northwest Sudan). in Krzyzaniak et al. (eds.) 2003: 105-127.
- Midant-Reynes, B., and N. Buechez 2002 *Adiama. 1. Economie et habitat*, IFAO/ Cairo.
- Midant-Reynes, B. and Y. Tristant (eds.) in press *Egypt at its Origins 2*, Peters/ Leuven.
- Nekhen News*, (Published for The Friends of Nekhen), London.
- Remar, H. 2002 Trouvailles prédynastiques et des premières dynasties du désert de l'Ouest et libyque. Résultats du projet ACACIA. *Archéonil* 12: 95-100.
- Smythe, J. 2004 The Pottery from Operation 3/ Tomb 1 at Helwan. in Hendrickx et al. (eds.) 2004: 317-335.
- van den Brink, E.C.M. and T.E. Levy (eds.) 2002 *Egypt and the Levant. Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium B.C.E.*, Leicester University Press/ London and New York.
- van Walsem, R. 2003 Une tombe royale de la deuxième dynastie à Saqqara sous la tombe Nouvel Empire de Meryneith, Campagne de fouille 2001-2002. *Archéonil* 13: 6-15.
- Vermeersch, P.M., W. van Neer and S. Hendrickx 2004 El Abadiya 2, A Naqada I Site near Danfiq, Upper Egypt. in Hendrickx et al. (eds.) 2004: 213-276.
- Wilkinson, T.A.H. 1999 *Early Dynastic Egypt*, Routledge/ London and New York.
- Wilkinson, T.A.H. 2000 Political Unification: towards a reconstruction. *MDAIK* 56: 377-395.
- Wilson, P. 2006 Prehistoric Settlement in the Western Delta: A Regional and Local View from Sais (Sa el-Hagar). *JEA* 92: 75-126.
- Wilson, P. and J. Rowland 2006 The Delta Survey, 2004-2005. *JEA* 92: 1-13.
- 高宮いづみ 2003: 『エジプト文明の誕生』 同成社

<定期刊行誌の省略名称>

BIFAO = Bulletin de l'Institut français d'Archéologie orientale, Le Caire.

JEA = Journal of Egyptian Archaeology, The Egypt Exploration Society, London.

JARCE = Journal of American Research Center in Egypt, Cairo.

MDAIK = Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Institut, Abteilung Kairo, Wiesbaden/ Mainz.

高宮 いづみ
近畿大学文芸学部
Izumi H. TAKAMIYA
Kinki University